

芸術ワークショップ2011B

世界的サウンドアーティスト鈴木昭男とともに展覧会を行い

さらに Art at Tokyo に参加し各自の音楽を多くの人に発表

基本的に10月25日から11月26, 28, 29日を除いて 午後4時50分から6時20分まで、11月29日の多層オーケストラのパフォーマンスには出席が必要。

単位数 2単位

日程

10/25 16:50 ~ 18:20 授業開始 いきなりキャンパスの

「点音」にガイドして聴取の体験とレクチャー「裸の耳」

10/26 -展覧会場- 観賞 説明的講義

10/27 創作楽器 ANALAPOS 誕生にいたる話と演奏

10/28 日常の素材 例えば 新聞紙を使った「コンセプト
チャル・サウンド・パフォーマンス」実演と話

10/31 既存の音楽世界をはなれて「ガラクタ」

の可能性を探る「階段に物を投げる」講話

11/01 各自好きな素材を羅列 意見交換

11/02 実際に音を出して聴き合う 意見交換 -展覧終

了日-

11/21 お土産話的講義と前回出しておいた素材に関する宿題の検討

11/22 各自好きな素材別に グループ分けをし 計画を話し合う

11/23 グループごとに作品化への試みを進める アドバイス

11/24 グループ・各自が自由練習 アドバイス

11/25 グループごとにテスト・演奏 感想を延べ合う アドバイス

11/26 午後4時から 再度 コンサートに向けて 作業の調整 アドバイス

11/28 夜 19:00 より 一部 学生グループのリハー

サル 二部のリハーサル

11月29日 18時30分-20時 Art at Tokyo Tech に参加

鈴木明男の音楽とダンス- Palette of sound

第一部 多層オーケストラ

第2部 音とダンスのコラボレーション

鈴木明男

鈴木昭男は、「音と場の探求者」として世界中の多くの分野の芸術家達から注目されている。彼の活動は、1963年、名古屋駅の階段でバケツ一杯の“ガラクタをぶちまける”というパフォーマンスを発端としている。これは「バランスの良い階段に、物を投げると、心地よい

リズムがかえってくるのではないか」という『聴く』ことを主体とする欲求から発想されたものである。以来、現在にいたるまでこの姿勢を崩すことがない。60年代に遊び心から始めた“Self-Study（自修）Event”では、自然界を相手に一人「なげかけ」と「たどり」を繰り返す。そこで得られた体験から、70年代には合わせ鏡の構造を持つ「ANALAPOS」というエコー楽器を創作する。さらにこの楽器の延長線上となる「ひなたぼっこの空間（1988）」では、同じ構造の二面の巨大な壁を造築し、この空間で一日自然の音に耳を澄ますという試みを行なった。ここでまた新たな『聴き方』を発見することになる。また70年代後半から80年代にかけてコンセプチャル・サウンドワークと称されるパフォーマンスを展開。彼自身が決めた単純で厳格なルールに基づき、身近な素材を使って“知的な遊び”を繰り返す。無意味な即興演奏に対する批判という側面を持ちつつも、常に『聴く』側にまわることを意識して、場との関わり方を模索していく。秋の芸術祭（パリ・1978）、ドクメンタ8（カッセル・1987）など主要な音楽祭に招聘され、高く評価される。ベルリン/パリ/ストラズブルでの街のエコーポイントを探る「点音（おとだて）（1996）」、ザールブルッケンの市立ギャラリーで発表した「花（1997）」、人は音を発掘すると題された「pyramid（1999）」など、無音のサウンド・インスタレーションを発表した。これら無音の作品群は、過去の認識論としての音楽を問うたものではなく、音楽の所在そのものにまで踏み込んだものである。作品との遭遇によって喚起された体験者自身の過去の経験や記憶が、新たな経験として再構築されることが、作品を『聴く』という根源的部分にまで到達している。ベルリンの daad 画廊で発表した「tubridge（1999-2000）」での体験は、彼のその後の作品に新たな展開を与えることになった。自らが音源を録音・作成し、独自に考案した出力装置を持つ電気音響を取り入れることにより、音を再構築し“場の因子”を『聴く』実験が実現した。ベルリン SFB 放送局ホワイエでの音のドロイング「Mowe（2002）」、場の構築に対する一つの提言を含む「なげかけ&たどり（2002）」である。訪れた人は、降り積もる空間としての時間軸である作者設定の「場」を体験することになる。2002年ロンドンのブルネイ・ギャラリー・レクチャー・シアターで始めたシリーズ「もがり」では、彼の家系に古代より伝えられる自然石そのままの“stone-flute（磬笛）”の吹奏を主軸に、その時々々の空間や場をとらえ、予測不能の圧倒的パフォーマンスで、音楽を通じての自身の帰結を探っている。

連絡先 肥田野 登 教授 nhidano@soc.titech.ac.jp